

日本計量生物学会2001, 2002年度役員選挙について

下記の要領で役員選挙を実施いたしますので、お知らせします。

日本計量生物学会2001, 2002年度役員選挙要領

1. 本ニュース・レターに記載されている被選挙人名簿から、理事を3名、監事を1名選出し同封の投票用紙に記入して、締切日までに無記名で投函して下さい。なお、会費を2年以上滞納している人は、選挙権・被選挙権ともにありません。
2. 締切日は、2000年10月31日です（消印有効）。
3. 次の投票は無効となります。
 - (1) 所定の用紙以外による投票
 - (2) 理事3名、監事1名を超えて記入した投票
 - (3) 投票者の氏名など余分な記入のある投票
4. 詳しくは、本ニュース・レターに記載の選挙細則をご覧ください。

日本計量生物学会

選挙管理委員会

委員長 椿 美智子

委員 栗原 律子

日本計量生物学会会則

[総則]

1. 本会は日本計量生物学会（The Biometrics Society of Japan）と称する。
2. 本会の事務局は、補則で定める。

[目的及び事業]

3. 本会は生物学・医学・農学その他の関連分野における科学研究を計量的・数学的・統計的方法を用いて推進するとともに、その研究の普及、研究者相互の交流を促進し、かつ、外国の研究団体との連絡を図ることを目的とする。
4. 本会は前条の目的を達成するために、次の事業をおこなう。
 - (1) 研究発表会・講演会・シンポジウムの開催
 - (2) 会誌・図書および資料の刊行
 - (3) 外国の関連学会との連絡および協力
 - (4) その他前条の目的を達成するために必要な事業

[会員]

5. 本会の会員は次のとおりとする。
 - (1) 正会員…第3条にあげた研究に従事する者またはそれに関心を有する者
 - (2) 学生会員…大学の学生（大学院をふくむ）あるいはこれに準ずる者
 - (3) 賛助会員…本会の目的に賛同し、その事業に財政的援助をする者または団体
 - (4) 名誉会員…本会の発展に多大な貢献をした者で、別途定める細則によって理事会において推薦され、総会において承認された者
6. 本会に正会員または学生会員として入会しようとする者は、正会員1名の紹介により、理事会の承認を受けなければならない。
7. (1) 会費として正会員は年額10,000円、学生会員は5,000円、賛助会員は一口10,000円以上を毎年1月末日までに納入しなければならない。ただし、国際計量生物学会からの機関誌Biometricsの送付を希望しない者の会費は、正会員・学生会員とも年額4,500円とする。

(2) 名譽会員の会費は無料とするが、Biometricsの送付を希望する者は、国際計量生物学会会員としての実費を負担しなければならない。

8. 会費を2年以上滞納した者は、理事会において退会したものとみなすことができる。

9. 会員はつぎの特典を受ける。

(1) 本会が刊行する会誌および資料の配布を受けること

(2) 本会の行う事業の通知を受けこれらに参加すること

(3) 会則及び別に定める規則により、本会役員の選挙権および被選挙権を有すること

(4) 国際計量生物学会の機関誌Biometricsを年4回受領する(ただし前記7のただし書きに該当する者は除く)

[役員]

10. 本会に次の役員を置く。

(1) 理事若干名、うち1名を会長とする

(2) 監事2名

11. 理事および監事は正会員のなかから選任する。役員の選任方法については総会で定める。会長は理事会において互選する。

12. 会長は本会の業務を総理し、理事会の議長となり、また本会を代表する。理事は理事会を組織し、総会の権限に属する事項以外の事項を議決し、執行する。理事のなかから庶務担当・会計担当および編集担当をそれぞれ1名選任する。

13. 本会の役員の任期は2年とし再選を妨げない。ただし、会長は連続して2期4年を越えることはできない。

14. 役員に欠員を生じたときは、理事会の議決により後任を補充することができる。後任者の任期は前任者の残りの期間とする。

[会議]

15. 本会の会議は総会と理事会とする。総会は通常総会と臨時総会とする。総会は正会員・学生会員・名譽会員および賛助会員のなかの個人会員をもって組織する。理事会は理事をもって組織する。

16. (1) 通常総会は毎年1回、会長が招集する。

(2) 臨時総会は理事会または監事が必要と認めたとき、会長が招集する。また、会長は正会員の10分の1以上から会議の目的を記載した書面による請求があったときは、これを招集しなければならない。

(3) 通常総会を招集するには少なくとも6週間以前に、会議の目的である事項、日時および場所を記載した書面をもって会員に通知しなければならない。

17. 通常総会の議長は会長とし、臨時総会の議長は出席正会員の互選によって定める。

18. 総会はこの会則で定めるもののほか、次の事項について議決する。

(1) 事業計画および収支予算についての事項

(2) 事業報告および収支予算についての事項

(3) その他本会の運営に関する重要な事項

19. (1) 総会は正会員現在数の5分の1以上の者が出席しなければ、その議事を開き、議決することができない。ただし、当該議事につき、あらかじめ書面をもって意思を表示した者または表決の委任者は出席者とみなす。

(2) 総会の議事は出席者の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

20. 理事会はこの会則に定めるもののほか、次の事項について議決する。

(1) 総会に提案すべき事項

(2) 会務の執行に関する事項

(3) その他会長が必要と認めた事項

[会則の変更および解散]

21. (1) 本会則の改正には総会において出席者の3分の2以上の議決を経なければならない。
(2) 補則の改定は理事会で議決し、総会に報告する。

[補則]

1. 本学会は国際計量生物学会IBSの日本支部を兼ねる。会長、庶務理事、会計理事はそれぞれ同支部のPresident, Secretary, Treasurerを兼務する。
2. IBSのCouncil memberは本学会の理事に就任する。
3. 本会の事務局は、財団法人統計情報研究開発センター内におく。(1999年改訂)

日本計量生物学会役員選出に関する細則

(総則)

1. 本会の役員を選出、および委嘱等は会則のほか、この細則の決めるところによる。
2. 理事の定数は、当分の間20名以内とする。ただし、そのうちの15名の選出は正会員の選挙による。ほかは選挙後の当選人による連絡会議に於て必要に応じて推薦により追加するものとする。
3. 監事は2名とし、選出は正会員の選挙による。ただし、理事は監事を兼ねることができない。
4. 会長、庶務理事、会計理事は理事会が理事の中から互選し、総会の承認を経て選出する。
5. 各種委員会の委員は、理事会において委員長を理事の中から委嘱し、他は正会員の中から選考し、委嘱する。
6. 役員任期は、1月1日から12月31日までの2年間とする。ただし、中途就任の役員任期は、就任の日から前記の期間とする。

(理事および監事の選挙)

7. 理事および監事は、郵送による無記名投票によるものとする。
8. 選挙を公正、かつ円滑に進めるために、選挙管理委員会を設置し、その管理下で実施する。
9. 理事および監事の選挙人と被選挙人は、選挙年の10月1日現在、正会員であるものに限る。
10. 選挙方法等は、選挙管理委員会内規として別に定める。

(当選者の就任)

11. 理事および監事に当選したものは、原則として就任を辞退できない。

(追加理事の推薦)

12. 理事の当選人は選挙直後に連絡会議を開催し、必要に応じて推薦理事5名以内を選出することができる。
13. 推薦理事の選出は、会則の補則2条によるものの他は、当選理事の専攻分野と地域性等を配慮して行う。

(三役の選出)

14. 会長、庶務理事、会計理事の選出は、選挙後の第1回理事会で選出する。ただし、理事会における選出方法は出席理事（委任状提出者も含む）の互選による。

日本計量生物学会選挙管理委員会内規

1. 選挙管理委員会（以下、委員会）は、理事会が正会員の中から委嘱する委員長1名、委員1名により構成される。
2. 委員会は、選挙日程（投票締切日、開票日など）、選挙人および被選挙人の資格条件等を決定し、有資格の正会員に告示し、選挙を実行する。

3. 投票は、郵送による無記名投票とし、委員会が定めた投票用紙により、理事3名、および監事1名を投票する。
4. 所定の用紙以外による投票や、差出人（投票者）の氏名を記した投票は無効とする。
5. 投票用紙の送付に際しては、以下の事項を含む文書を選挙人の便に供するため添付する。
 - (1) 選挙人および被選挙人の資格、投票の郵送先、投票締切日、投票の有効性などの概要
 - (2) 被選挙人名簿
 - (3) その他、委員会が必要と認める事項
6. 開票作業は、選挙管理委員会が行う。
7. 当選人の決定は、以下の規則に従うものとする。
 - (1) 理事は、有効投票の最多数の得票者から順に上位15名を当選人とする。
 - (2) 監事は、有効投票の最多数の得票者から順に、理事の当選人以外の上位2名を当選人とする。
 - (3) 理事、監事の当落の境界に同数の得票者があり、定数を越える時は、委員会が抽選で選ぶ。
 - (4) 当選人の決定に関して疑義が生じた場合は、そのつど委員会に於いて決定する。
8. 開票後、委員会は当選人に当選の旨をすみやかに通知する。また、委員長は、理事会に対して以下の報告書を提出する。
 - (1) 投票締切日、開票日時および場所
 - (2) 有権者総数、有効投票人数、無効投票人数、有効記名数
 - (3) 理事、監事の当選人の氏名、得票数の一覧表
9. 委員会の任務は、当選人への通知と理事会への報告書提出をもって終わりとする。

日本計量生物学会被選挙人名簿

(2000.10.1 現在))

青柳 誠	イー・ピー・エス(株)	石野 得三	山之内製薬(株)
赤澤 宏平	新潟大学医学部附属病院	石橋 直久	ウェルファイド(株)
縣 俊彦	東京慈恵会医科大学	和泉 志津恵	(財)放射線影響研究所統計部
浅井 晃		伊豆本 透	ノバルティスファーマ(株)
浅野 弘明	京都府立医科大学医療短大部	伊藤 孝一	南山大学
蘆田 一郎	新潟大学農学部	伊藤 博之	セローノ・ジャパン(株)
安達 毅	シェリング・プラウ(株)	伊藤 要二	アストラゼネカ(株)
安達 健	イー・ピー・エス(株)	稲田 紘	東京大学大学院工学系研究科
安部 一郎	立教女学院短期大学	稲田 充男	豊橋創造大学経営情報学部
天野 秀紀	(財)東京都老人総合研究所	猪原 正守	大阪電気通信大学情報工学科
有田 清三郎	関西医科大学教養部	今井 啓之	ファイザー製薬(株)
安藤 正一	山之内製薬(株)	祝前 博明	新潟大学農学部農業生産科学科
安楽 和夫	西南学院大学	岩崎 正和	クインタイルズ・アジア・インク
飯塚 悦功	東京大学大学院	岩崎 学	成蹊大学工学部経営工学科
井 洋一	ファイザー製薬(株)	岩元 和正	(株)アズウェル (ネスコカンパニー)
池田 正人	産業医科大学産業保健経済学教室	岩本 光司	武田薬品工業(株)
石井 丈夫		上坂 浩之	日本イーライリリー(株)
石川 和明	バイオスタット(株)	上原 秀昭	(株)ツムラ
石川 秀樹	大阪府立成人病センター研究所第10部	上村 一夫	流通経済大学
石塚 直樹	国立がんセンター研究所	上村 賢治	日本大学生物資源科学部
		魚井 徹	山之内製薬(株)
		鶴飼 保雄	

浦狩 保則	塩野義製薬(株)	菊地 正悟	愛知医科大学公衆衛生学
江口 真透	統計数理研究所	菊池 泰樹	長崎大学医療技術短期大学部
大石 正平	科研製薬(株)中央研究所	岸野 洋久	東京大学大学院農学生命科学研究科
大石 雅彦	ファイザー製薬(株)	岸本 淳司	(株)SASインスティテュートジャパン
大内 幹夫	サントリー(株)	北田 修一	東京水産大学
大隅 昇	統計数理研究所	絹川 直子	九州大学医学部附属病院
大瀧 慈	広島大学原爆放射能医学研究所	木村 清郎	
大竹 正徳	岡山大学環境理工学部環境数理学科	浄住 勤慈	大日本製薬(株)
大槻 成章	呉羽化学工業(株)	清見 文明	ノボノルディスクファーマ(株)
大野 長壽	大正製薬(株)総合研究所	楠 正	
大橋 靖雄	東京大学大学院医学系研究科	工藤 昭夫	兵庫大学
大森 宏	東京大学大学院	工藤 孝英	アストラジャパン(株)
岡 健司	(株)日本海洋生物研究所	久保 真	IBRD JAPAN(株)
緒方 裕光	国立公衆衛生院放射線衛生部	熊谷 明夫	三菱東京製薬(株)
岡本 朋子	大塚製薬(株)	熊澤 蕃	日本原子力研究所国際原子力総合技術研修センター
丘本 正	追手門学院大学経済学部	隈本 秀樹	
小川 幸男	クインタイルズ・アジア・インク	栗林 和彦	日本イーライリリー(株) リリーリサーチラボラトリーズジャパン
奥 喜正	流通経済大学流通問題研究所	栗原 律子	エーザイ(株)
小澤 賢一	キッセイ薬品工業(株)	巖 浩	イー・ピー・エス(株)
尾島 善一	東京理科大学理工学部経営工学科	河本 綏雄	東京理科大学
小田 英世	日本イーライリリー(株)	越水 孝	バイエル薬品(株)
織田 健次郎	農業環境技術研究所	小谷 孝一	東京理科大学
越智 義道	大分大学工学部	後藤 浩司	(株)ベルシステム24
斧田 大公望		後藤 昌司	大阪大学大学院基礎工学研究科
折笠 秀樹	富山医科薬科大学	後藤 みづみ	ウェルファイド(株)
鍵村 達夫	日本ベーリンガーインゲルハイムK.K.	小西 貞則	九州大学大学院
柏木 渉	大鵬薬品工業(株)	小林 康毅	東京大学大学院
嘉田 晃子	住友製薬(株)	駒澤 勉	
片岡 正彦	富山化学工業(株)	米虫 節夫	近畿大学
片山 和夫	塩野義製薬解析センター	小山 暢之	三共(株)
加藤 真	小野薬品工業(株)	Cologne (John B.)	(助)放射線影響研究所
金澤 雄一郎	筑波大学	近藤 貞昭	野菜・茶業試験場
金森 雅夫	浜松医科大学	近藤 久義	長崎大学医学部原爆資料センター
金藤 浩司	統計数理研究所	今野 吉彦	千葉大学理学部数学科
鎌倉 稔成	中央大学理工学部	斎尾 乾二郎	
神尾 正巳	東京慈恵会医科大学	斉藤 佳世	(株)CRC総合研究所
萱沼 康	山之内製薬(株)	酒井 弘憲	三菱東京製薬(株)
河井 浩	日本オルガノン(株)	阪口 紘治	九州大学経済学部
河内 功	ファルマシア・アップジョン(株)		
河村 徹郎	鈴鹿医療科学大学	佐々木 紀幸	日本アルコン(株)
管家 英治	宇都宮大学	佐々木 秀雄	旭化成工業(株)
管野 隆三	東京歯科大学	佐々木 義之	京都大学大学院
菊池 圭一	ブリストル・マイヤーズスクイブ(株)	佐藤 邦弘	日本化学工業(株)

佐藤 喬俊	クインタイルズ・アジア・インク	高橋 行雄	日本ロシュ(株)
佐藤 俊哉	京都大学大学院医学研究科	滝沢 博	協和発酵工業(株)
佐藤 昇	日本オルガノン(株)	田栗 正章	千葉大学理学部
佐藤 学	広島県立保健福祉大学	竹内 公男	新潟大学農学部
佐藤 義治	北海道大学工学研究科	竹内 啓	明治学院大学横浜校舎
澤 淳悟	シェリング・プラウ(株)	竹内 通夫	シミック(株)大阪支社
塩見 正衛	茨城大学	竹澤 邦夫	北陸農業試験場研究技術情報科
繁樹 算男	東京大学総合文化研究科	竹綱 正典	田辺製薬(株)
篠崎 信雄	慶応義塾大学理工学部管理工学科	田崎 武信	塩野義研究所解析センター
柴田 大郎	国立医薬品食品衛生研究所	田澤 司	(株)数理システム
柴田 義貞	長崎大学医学部付属原爆後障害医療研究施設	龍原 哲	新潟大学農学部生産環境科学科
渋谷 政昭	高千穂商科大学	田中 純子	広島大学医学部衛生学教室
島崎 茂樹	三菱東京製薬(株)	田中 健	(株)日本科学技術研修所
島田 勝則	東京女子医科大学	田中 豊	岡山大学環境理工学部
島田 公	アストラゼネカ(株)	谷川 智彦	北陸製薬(株)
島村 正道	熊本大学医療技術短期大学部	種村 正美	統計数理研究所
清水 邦夫	慶應義塾大学	玉井 康治	イー・ピー・エス(株)
清水 秀史	三井製薬工業(株)	田宮 高紀	東京理科大学理工学部教養科
志村 健一	琉球大学法文学部総合社会システム	田村 義保	統計数理研究所
庄武 孝義	京都大学霊長類研究所	丹後 俊郎	国立公衆衛生院疫学部理論疫学室
正法地 孝雄	広島大学総合科学部	辻谷 将明	大阪電気通信大学総合情報学部
白木原 国雄	三重大学生物資源学部	津谷 喜一郎	東京医科歯科大学難治疾患研究所
新行内 康慈	帝京科学大学理工学部	椿 広計	筑波大学大学院経営システム科学専攻
新谷 茂	(財)日本中毒情報センター	椿 美智子	電気通信大学システム工学科
新藤 純子	農業環境技術研究所	坪田 信孝	広島大学医学部衛生学教室
金 明哲	札幌学院大学	出村 政嗣	大日本製薬(株)
菅波 秀規	興和(株)	寺尾 哲	武田薬品工業(株)
須川 和明	北星学園大学経済学部経営情報学科	寺嶋 達雄	参天製薬(株)
菅原 誠太郎	森永乳業(株)生物科学研究所	寺西 孝司	塩野義製薬(株)中央研究所解析センター
杉浦 成昭	日本女子大学数物科学科	手良向 聡	アムジェン(株)
杉田 稔	東邦大学医学部衛生学教室	土岐 恵美	萬有製薬(株)
杉森 俊彰	日本アイ・ビー・エム	徳永 章二	九州大学大学院医学系研究科
鈴木 和幸	電気通信大学システム工学科	戸田 修二	シミック(株)
鈴木 啓市郎	ノボノルディスクファーマ(株)	百々 秀夫	大日本製薬(株)
鈴木 茂		富沢 貞男	東京理科大学理工学部情報学科
鈴木 智子		朝野 芳郎	ファイザー製薬(株)
関 利之	キリンビール(株)	永井 正規	埼玉医科大学公衆衛生学教室
関根 広	東京慈恵会医科大学	中島 栄二	放射線影響研究所統計部
惣田 隆生	塩野義製薬解析センター	長谷 文雄	ヘキスト・マリオン・ルセル(株)
高木 廣文	新潟大学医学部保健学科	中田 雅臣	アストラゼネカ(株)
高津 順吉	大洋漁業(株)	永見 俊之	日本農薬(株)
高野 泰	東京大学農学部生物測定学研究室	中村 剛	長崎大学環境科学部
高橋 秀人	筑波大学社会医学系	中村 永友	札幌学院大学経済学部
高橋 秀之	日本オルガノン(株)	中村 典裕	愛国学園大学人間文化学部

中村 靖彦	ソルベイ明治薬品(株)	藤田 利治	国立公衆衛生院疫学部
永谷 憲司	日本イーライリリー(株)	伏見 正則	南山大学数理情報学部
鳴島 陸子	(株)アジャスト	舟喜 光一	持田製薬(株)
西 晃央	佐賀大学文化教育学部	船渡川 隆	中外製薬(株)
西尾 敦	明治学院大学経済学部	古川 敏仁	(株)バイオスタティステイカルリサーチ
西岡 孝彦	信州大学繊維学部	古川 俊之	国立大阪病院
西川 匡英	鹿児島大学農学部	逸見 功	日本赤十字看護大学
西川 浩昭	筑波大学医療技術短期大学部	細萱 茂実	山梨医科大学医学部附属病院検査部
西 次男	クインタイルズ・アジア・インク	本田 純久	長崎大学医学部原研疫学
西脇 茂利	(財)日本鯨類研究所	本多 正幸	千葉大学医学部附属病院医療情報部
二宮 正士	農業研究センター	前田 博	藤沢薬品工業(株)
野沢 昌弘	東京理科大学経営学部		
野田 健夫	イー・ピー・エス(株)	松井 研一	東邦大学医学部公衆衛生学教室
野村 哲郎	京都産業大学工学部	松井 茂之	大分県立看護科学大学
拝野 克行	日本シェーリング(株)	松浦 正明	広島大学原医研環境情報計量生物
芳賀 敏郎	東京理科大学工学部経営工学科	松岡 浄	藤沢薬品工業(株)
袴田 共之	農業環境技術研究所	松尾 富士男	(財)化学及血清療法研究所
橋本 修二	東京大学大学院医学系研究科	松沢 照男	北陸先端科学技術大学院大学
橋本 哲男	統計数理研究所	松田 博明	丸石製薬(株)
橋本 敏夫	ウェルファイド(株)	松田 裕之	東京大学海洋研究所
長谷川 政美	統計数理研究所	松原 義弘	塩野義製薬(株)
秦 正弘	鳥居薬品(株)	松村 康弘	国立健康・栄養研究所
畑村 又好		松本 幸雄	国立環境研究所
鳩山 由紀夫	衆議院議員	松山 裕	京都大学大学院医学研究科
馬場 光正	帝国化学産業(株)	三浦 幹彦	信州大学繊維学部経営工学研究室
馬場 康維	統計数理研究所	三上 俊明	日本オルガノン(株)
濱崎 俊光	ファイザー製薬(株)	水野 正一	東京都老人総合研究所
浜田 知久馬	京都大学大学院医学研究科	光森 達博	
濱野 鉄太郎	統計数理研究所	三中 信宏	農業環境技術研究所
林 邦彦	群馬大学医学部保健学科	南 美穂子	統計数理研究所
林 武司	農林水産省畜産試験場	宮井 俊一	農林水産省中国農業試験場
林 知己夫		宮井 正弥	姫路獨協大学一般教育部
比江島 欣慎	山梨医科大学医学部数理情報科学	宮入 加寿也	Suntory Pharmaceutical Inc.
兵頭 義史	岡山理科大学理学部応用数学科	宮岡 悦良	東京理科大学理学部二部数学科
平岡 政隆	広島大学原爆放射能医学研究所	宮川 強	東京理科大学理工学部
平河 威	ファイザー製薬(株)	宮川 三郎	農業環境技術研究所
廣岡 秀樹	山之内製薬(株)	宮下 光令	東京大学大学院医学系研究科
廣津 千尋	明星大学理工学部数学教室	宮本 陸彦	シミック(株)
福田 賢一	帝人(株)	三輪 哲久	農業環境技術研究所
福富 和夫		村岡 了一	味の素(株)
藤井 良宣	宮崎大学教育学部	村上 義孝	大分県立看護科学大学
藤川 弘之	明治製薬(株)	桃川 聖司	日本新薬(株)
藤越 康祝	広島大学大学院	盛 昭雄	東レ(株)
藤田 正一郎	放射線影響研究所	森川 敏彦	武田薬品工業(株)

守屋 和幸	京都大学大学院情報学研究科
矢島 敬二	東京理科大学経営学部
柳井 晴夫	大学入試センター研究開発部
柳川 堯	九州大学理学部数学教室
柳本 武美	統計数理研究所
矢船 明史	北里大学大学院薬学研究科
山内 勇二	帝国臓器製薬(株)
山内 平介	大日本製薬(株)
山岡 和枝	帝京大学法学部
山口 拓洋	東京大学大学院医学系研究科
山口 直人	国立がんセンター研究所
山口 行治	ファイザー製薬(株)
山崎 直樹	武田薬品工業(株)
山崎 秀夫	東京都立大学理学研究科体育学教室
山田 作太郎	東京水産大学
山田 剛久	イー・ピー・エス(株)
山村 光司	農業環境技術研究所
山本 英二	岡山理科大学
山本 精一郎	国立がんセンター研究所
鎗田 政男	住友製薬(株)
横山 英明	自治医科大学医学情報学教室
吉川 敬	
吉澤 正	筑波大学大学院経営システム科学
吉田 彰夫	日本化薬(株)
吉原 素子	日本ロシュ(株)
吉村 功	東京理科大学工学部経営工学科
和田 武夫	関西福祉大学
渡邊 裕之	帝人(株)
和田 康彦	佐賀大学農学部生物生産学科
汪 金芳	統計数理研究所

会長から一言

吉村 功

今の理事会の任期も後わずかになりました。選挙です。投票用紙が来たら、即座に投票をお願いします。後で、とすると気がついたら期限が過ぎていた、ということになります。

投票のときに注意してほしいことがあります。いつも理事になっている人に偏らせないことです。理事になっていると、いろいろなことで名前がでますし、目立ちます。あの人なら世話役をやってもらってまかせられる、という人がいつも理事を続けることになります。そうなるとうどうでし

よう。理事会自体が歳を取って、新しい発想がなくなります。計量生物学会の活動がこのところやや伸び悩んでいるのは、私の無能・怠慢ということもありますが、理事会がやや手慣れた仕事の繰り返しをしていることもあるように感じています。

今度の投票では、今までの顔ぶれと違う人に投票することを考えて下さい。特に女性を増やすことをお願いします。あまりにも女性の役員が少なすぎると感じるのです。年齢的な若返り、東京以外の人の増加なども考えて下さい。

そして何よりも、投票率を上げることです。

日本学術会議報告

第4部会員、統計学研究連絡委員会担当 吉村 功

2000年7月から3年間の任期で、日本学術会議の第18期がスタートしました。今期も前期に引き続き、第4部の統計学の分野から私が選ばれ、統計学研究連絡委員会を担当することになりました。私としては、関連学会の会員の皆様に、なるべく迅速に立場上で得られる情報をお知らせしたいと思っています。なお、第3部の経済統計学の分野からは松田芳郎氏が会員に選ばれています。

新しい期の第1会合は、7月26日～28日にかけて開かれました。といっても、総理大臣からの任命の儀式と、会長等の役員を選出だけで、実質的な動きはまだです。会長には、前期から引き続いて吉川弘之氏が選ばれました。単記無記名選挙です。

その後、副会長等の選挙が、テレビで見えるような歩みで繰り返し行われたものですから、けっこう時間がありました。その合間に会員全体210人についての統計を取ったところ、次のような結果でした。手作業ですから、多少の誤差はあるかもしれませんが、おおよその傾向は出ていると思います。

- 1) 生年分布：1925年まで（以前）＝1.4%，1925～30年まで＝11.3%，1930～1935年まで＝33.3%，1935～1940年まで＝34.3%，1940～1945年まで＝16.7%，1945～1950年まで＝2.9%，平均，中央値とも約64歳。
- 2) 前期からの継続会員：44%，ただし第4部（理学）に限ると61%で、なぜ重任が多い

かは分かりません。(会員は3期を超えられません。)

3) 性別分布: 男性=96.7%, 女性=3.3% (7人)

4) 出身大学: 東大=45%, 京大=13%。

この結果から、皆さんが何を考えになるかは、学術会議とはどのような存在なのか、という認識によります。いろいろ論議をして、次回のためにどんな人を選ぶようにした方がよいか、方向性を考えておいて下さい。学術会議全体としては、とにかく女性会員を10%に増やすというのが努力目標になります。ついでに言いますと、国際統計協会 (ISI=International Statistical Institute) の会員における女性の比率が、日本が極端に低いから、女性の会員を推薦するようにしてくれ、という注文が国際統計協会の理事会からわざわざ手紙で来ています。いわば黒船が圧力をかけているようなものですが、開国は歴史の必然だったように、これに対応することが必要なことではないでしょうか。

学術会議については、二つの役割が重要だと私は考えています。一つは、関連学会・関連研究分野間の協調をはかること、もう一つは、政府の学術政策に学者・研究者の意向を反映させることです。

私自身は、統計学の分野から選ばれていますので、前者については、統計学関連のことを担当します。後者については、理数教育で問題になっている、学力低下への歯止めをどうすればかけられるかを、理科と数学の関係会員と共にワーキンググループを作って研究していきたいと考えています。

私が担当している統計学研究連絡委員会は、10月にスタートします。委員としては、後に示す方を候補として申請しています。任命があり次第、会合を開きますが、統計学の外に統計学の研究課題があり、研究者の関与が求められているか、に焦点を合わせていこうと考えています。

なお、昨年夏に行ったシンポジウムについては、報告を論文形式で公刊することを「統計学会誌」に依頼中です。遅れていて申し訳ありません。

研連委員候補: 学術会議第1部=佐伯胖, 第2部=堀部政男, 第3部=松田芳郎, 第4部=吉村功, 第5部=久米均, 第6部=鈴木和夫, 第7

部=角田文男, 日本統計学会=竹村彰道, 渡辺美智子, 日本行動計量学会=馬場康維, 応用統計学会=柳川堯, 日本計算機統計学会=垂水共之, 計量生物学会=大瀧慈, 日本数学会統計数学分科会=景山三平, 以上14名です。

日本計量生物学会・応用統計学会 2000年度合同年次大会報告

2000年5月11, 12日に開催された、合同年次大会の各セッションについて座長, オーガナイザー, 司会者などから報告頂いたので, 発表順に紹介する。

一般講演 I について

座長 森川敏彦 (武田薬品工業(株))

3題とも臨床試験に関わるものであった。フロアからは活発な意見がなされ, 20分 (講演15分, 討論5分) の持ち時間では十分ではなかった。できれば各講演とも持ち時間30分 (講演20分, 討論10分) は欲しいところであった。

演題1. 小山暢之 (三共) 「中間解析結果に依存した解析時点の選択と棄却限界値」

α 消費関数に基づく中間解析アプローチは, 解析時点や解析回数を任意に定め得る柔軟なアプローチとして知られているが, 解析時点の決定は, それ以前の解析結果とは独立になされる必要がある。演者はこの条件を緩め, 解析結果に依存する解析時点の選択を可能とすることにより, 中間解析の検出力を上げる試みを行った。結果として解析を一回だけ増やすという条件での定式化は果たしたものの, 試みた範囲では演者の期待した結果は得られなかった。平均サンプルサイズや早期停止確率等の評価がなされていないことにより, フロアからは研究目的が明確でないとの意見が出された。また途中の結果を利用するというアイデアは生存解析で生存曲線がクロスすることの予測に使えないかとの示唆もあった。

演題2. 安藤正一, 上坂浩之, 浦田正夫, 小宮山靖, 佐野修, 寺崎康世, 東宮秀夫 (日本製薬工業協会医薬品評価委員会統計特別小委員会) 「臨床試験における解析対象

集団の考え方」

臨床試験において、予め決めた実施規定（プロトコール）に対して様々な逸脱が生じるが、このような状況のもとでの解析対象とその取り扱いを決める際に生じる問題のいくつかについて、可能な取り扱い案に関する論点の整理が行われた。どのような問題が生じた場合にどのような対処をすべきかについて、このような形で問題点を整理し考え方をまとめておくことは重要であるが、一般に臨床試験において生じる問題は、いずれの案を用いても、問題が残る場合が多い。その点を踏まえた対策についての一歩突っ込んだ提言が欲しかった。フロアからはICH統計ガイドラインの用語の理解が不十分との声もあった。また当日の報告で述べられたような具体的な内容を予稿集に反映すべきではなかったかと感じられた。

演題3. 寒水孝司, 大森崇, 吉村功 (東京理科大学) 「臨床試験のための統計的原則における交互作用の取り扱い方についての検討」

施設×治療交互作用が存在しうるときに治療効果を比較するための2種類のアプローチ (ICH型: 先に主効果モデルをあてはめ, 次いで交互作用モデルをあてはめる; 従来型: 先に交互作用モデルをあてはめ, 交互作用が有意ならば主効果モデルをあてはめる) を, 受容率 (治療効果に差ありと判定する確率) を指標にして評価した結果が発表された。演者らは交互作用ありの場合には受容率は少ない方がよいとし, 交互作用の存在下でICH型の方が従来型より受容率が低くなるという意味でよいとした。フロアからは交互作用が存在する場合の主効果はどのように定義されどのような意味をもつと考えるのかについて演者らの見解を質す質問がなされた。これは質的か量的かといったことも含め交互作用の内容や程度を評価しないで治療効果の優劣判定が下せるのかといった主旨の質問と思われたが, その他にもサンプルサイズ5程度で施設の代表性ありとしてよいのか, あるいは単に受容率が相対的に低いということだけでそのアプローチをよしとしてよいのか, など本発表の問題の設定に種々の疑問が持たれた。更なる検討を望みたい。

一般講演Ⅱについて

座長 松浦正明 (広島大学)

演題4. 汪 金芳 (統計数理研究所) 媒Sexual risk exposures and UTI: a semiparametric local likelihood approach

セミパラメトリック局所擬似対数尤度から構成される局所擬似尤度比検定を提案し, 応用として尿路感染症 (UTI) と性行為に関連する共変量の影響を調べた。データには最尤推定を行うことができない退化した変数が含まれているため, ベイズモデルを用いて推定関数を構成しデータ解析を行った。数値実験としてオッズ比とp値に関する感度解析の結果も示した。使用したデータに基づく解析結果として, 経口避妊薬は無害無益であり, コンドームは危険要因, 活剤付きコンドームは保護要因として働くことを示し, 提案した方法論の有用性を心した。

演題5. 今西徹 (筑波大学) 「生存時間分析における極値分布の導出に関する考察」

「健康」, 「軽症」, 「重症」, 「死亡」などの離散的な順序尺度で表現される個体の状態を, 「生命力」という連続な潜在的状態変数に拡張し, 個体の状態を変化させる潜在変数と個体が死滅するまでの生存時間とが一定の束縛の下で確率変動すると考え, 個体の状態の時間的な推移を分布関数に関する偏微分方程式で定義し, その解から極値統計学におけるクンベル分布, フレッシュ分布およびワイブル分布が導出される事を示した。

演題6. 伊藤陽一, 大橋靖雄 (東京大学) 「QOL質問票における項目反応理論に対するパラメータ推定」

QOL質問票の評価のために, 項目反応理論におけるロジスティックモデルを, 順序カテゴリーデータに対応できるように比例オッズモデルに拡張し, 100名程度の少ない対象者数の制約下において既存の統計パッケージよりも性能の良い推定方法の提案を行った。応用事例としてパーキンソン病患者89名のデータを用い, 従来の方法 (MULTILOG) と本方法を比較するため, シミュレーションにより平均二乗誤差および残差プロットに関して検討を行い, 提案した方法の性能の

良さを示した。

ポスターセッションについて

司会者 椿 広計 (筑波大学)

今回、合同年次大会で初めてポスターセッションが行われ、4件の申し込みがあった。また、それ以外にも演題25についてのポスターが展示された。ポスターセッション参加者には、その概要を短時間で口頭発表もして頂いた。ポスターセッションをどのような時間帯に配置するかなど、運営上では若干の反省点がある。

演題7. 蘆田一郎, 祝前博明 (新潟大学) 「母性個体モデルにおける (共) 分散成分のREML推定のための一平均情報アルゴリズム」

肉用畜の母性形質改良という分野でも、Mixed Effect Modelが大きな役割を果たしており、分散成分推定に当たってはREML推定量が活用されている。この推定量を得るには、ニュートン法あるいは、それを修正した反復的数値計算が必要であり、ヘッセ行列をどのように構成するかが問題となる。本発表では、平均情報行列 (期待情報と経験情報との平均という意味であろう) を利用することのメリットが主張された。計算時間上のメリットについては、一般逆行列を明示的に与えている手法とその他のニュートン法的解法を比較するのは問題かと思うが、収束に至る挙動を見る限り提案された方法の優位性は確かに感じられる。

演題8. 庄條昌之, 祝前博明 (新潟大学) 「比率形質の表現型値と比率遺伝的メリットとの同時分布ならびに回帰関数の特性」

家畜の比率形質 (全量に対する経済的に重要な形質の割合) の比率遺伝的メリット (形質の中で環境要因以外の変動成分変量について全量と経済的に重要な形質の比率を考えたもの) による回帰関数を両者の同時分布に基づいて導出している。また、その近似解法も提案している。元になる変数が正值のため、2変量切断正規分布を想定分布としていることに若干の抵抗を感じるが、この種のアプローチは、他分野でも活用できると考える。

演題9. 祝前博明, 齊藤聖子 (新潟大学) 「外交

配集団を対象としたREML EMアルゴリズムによるQTL区間マッピング法」

DNAマーカー情報から外交配集団を対象とした育種価を予測する多くの方法では、QTLの位置情報を必要としていた。本研究では、線形混合モデルのEMアルゴリズムを用いたREML推定により分散成分とQTL区間マッピングを実現する方法を開発した。QTLの位置は過小推定の傾向があること、その改善には配偶子関係行列に関する推定精度を上げることが有効であることなどが報告されている。

演題10. 椿 広計 (筑波大学) 「混合状態を記述する統計モデル - Mixel問題への接近」

リモートセンシング土地被覆分類では、地上対象画素が多様なカテゴリーの混合として観測されることが多い。この種の問題に対して、確率的混合以外の接近法を考察した。混合状態を記述するモデルは幾つか考えられるが、感度解析の結果によると混合状態であることを考慮することが重要で、モデルの差は結果にあまり影響を及ぼさない。評者自身の発表なので、コメントは差し控える。

特別セッション「がん検診の有効性評価を考える」について

オーガナイザー 佐藤俊哉 (京都大学)

本セッションは、1998年に出版された「がん検診有効性等に関する情報提供のための手引」の作成メンバーである東北大学辻一郎先生にこれまでの日本のがん検診有効性評価のまとめを、長崎大学本田純久先生にはがん検診の有効性評価に関わる疫学的、統計的問題点のまとめを、国立がんセンター祖父江友孝先生には現在計画中のヘリカルCTを用いた肺がん検診の有効性評価デザインについて報告をお願いし、がん検診の有効性評価をどうおこなうか、について討論することを目的に佐藤・祖父江で企画しました。

辻先生 (演題11.) からは、日本ではがん検診有効性評価にランダム化試験が実施されたことはなく、ケース・コントローラ研究による評価であったこと、またケース・コントロール研究からでも有効性評価が可能であったがん検診もあったことが紹介されました。しかし、ケース・コントロール研究はすでに定着している検診方法の評価

には適切であるが、新たに導入を予定している検診を評価する際には、ランダム化試験と同じくらいの手間がかかる、という報告をしていただきました。

本田先生(演題12.)からは、アメリカで実施された肺がん検診による予防試験を例に、観察研究で検診効果を評価する際に注意しなければいけないバイアスである、セノレフセクション・バイアス(検診にくる人はもともと健康に対する意識が高く、健康である)、リードタイム・バイアス(検診でみつけても、病院でみつけても効果が変わらない場合でも、検診のほうが早く見つけている分だけよく見える)、レンジス・バイアス(進行が遅くたちのいいがんが検診でみつきやすい)、についてわかりやすい解説をしていただきました。

祖父江先生(演題13.)からは、アメリカで現在進行中のがん検診によるがん予防試験の紹介があり、データセンターの役割やダイレクトメソッドによる対象者リクルートを打っていることの報告がありました。そして、ヘリカノレクトを用いた肺がん検診の有効性評価を行うために日本で予防試験の計画を立てたところ、15000名の対象者を10年以上追跡する必要がある、総予算として少なく見積もって24億円かかることを報告していただきました。

フロアからたくさんの討論があり、もっとも根本的な問題は、なぜランダム化予防試験をしなければならないのか、でした。前向きの観察研究を行へ肺がんのステージングや将来判明するであろう肺がんのゲノム情報とあわせれば、比較的短時間で評価できるのではないかと。また、早期発見だけががん検診の有効性を規定するのであれば、病院で発見されたがんで早期のものと進行がんとの予後を比較すればいいのではないかと、などのご意見がありました。

各演者の答えはいずれも、観察研究だけの評価は難しい、でした。これは部位別特別セッション「がん検診の有効性」のがん死亡率は低く、検診で救える数はその中のほんの一部であることから、検診効果は観察研究で検証できるほど大きくなく、そのためにランダム化試験が必要とされているのが現状です。

最後に、演者、オーガナイザーともどもフロア

からのご意見の多くが、検診(というか「早期発見、早期治療」)は有効だ、ということを前提に話されている印象があり、この点はちょっととまどいをおぼえたことを申し添えておきます。

一般講演Ⅲについて

座長 三中信弘(農業環境技術研究所)

演題14. 談小健・岸野洋久(東京大学)「花の嗜好の多様性と階層モデル」

花卉作物の嗜好性を計量心理学の方法を援用しつつ数量化理論を用いて分析するとともに、嗜好性の構造をより正確に記述するために、超事訓分布を含む階層的ペイスモデルを摘要した。パンジーに関する選択アンケート調査データへの適用を行った。

演題15. 松田洋和・祝前博明(新潟大)「外交配集団のためのflankln9およびupstreamマーカーの情報を利用したQTLクラスター効果のBLUP」

単一QTLではないQTLクラスター効果の推定を行なうための理論的方法が講演された。QTLクラスターを含む部分の推定に対して、さまざまな分子マーカーとその組合せがどの程度の解像度を有するのかが議論された。

一般講演Ⅳについて

座長 竹村彰通(東京大学)

本セッションでは個票開示問題に関する発表が2件、極値理論に関する発表が1件あり、いずれも興味深い応用を含んだものであった。

演題16 星野伸明(金沢大学)「Pitman Sampling Formulaの個票開示リスク評価への応用」

Pitmanの自然数の確率分割モデルは従来のEwensのモデル等と比較して分布形が柔軟であり、個票開示問題への応用に関しても有用である事が期待される。この講演ではPitmanモデルの推定に必要ないくつかの理論的な結果を与えるとともに、日本の官庁統計データに応用し、従来の他のモデルと比較してPitmanモデルのあてはまりが非常によいことを示した。

演題17. 佐井至道 (岡山商科大学) 「予測個体数の期待値に基づく個票データのリスク評価」

個票開示問題では母集団一意数が開示リスクの尺度として用いられる事が多いしかしながら2意や3意でも個体の予測の意味では危険性があるさらに個体の識別がなくてもセンシティブ変数の予測が当たる可能性もある。この講演では、センシティブ変数を考慮した場合を含めて予測個体数という尺度を定義し、この尺度を用いて開示リスクに関する一般的な議論を展開した。

演題18. 高橋倫也 (神戸商船大学) 渋谷政昭 (高千穂商科大学) 「ウィクセル小球問題における最大球寸法の予測」

金属の疲労強度はそれに含まれる介在物の最大寸法に依存する事が知られている。この講演では、金属の断面写真から得られた介在物の2次元的な寸法から金属の含まれる球の3次元的な最大寸法を予測する問題を扱った。特に、実データに基づいて、極値理論のあてはまりや閾値の最適な設定について検討した結果を与えた。

広津千尋氏 (明星大学) による特別講演「分散分析を超えて」について

座長 柳川 堯 (九州大学)

魅力的なタイトルの下で、制約を持つパラメータ空間の仮説検定について、講演者が唱してきた累積カイ二乗検定とmax t検定のこれまでの研究成果のまとめと新しい発展についての特別講演(演題19)であった。九州大学は、かつて順序制約をもつ仮説の検定理論に関して、世界的権威である工藤昭夫氏を中心に野間口謙太郎氏(現高知大)、笹淵祥一氏(現九州芸工大)、坂田年男氏(現九州芸工大)、安楽和夫氏(現西南学院大)、岩佐学氏(現熊大)等からなる国際的に著名な強力研究拠点を形成していた。尤度比検定を研究対象とする難解な数学の理論的研究が主であった。これに対して、広津氏は応用統計学に視点をおき、有用性という観点から累積カイ二乗検定やmax t検定に焦点をあてて精力的に研究をおこなってきた。

講演では、まず、単調仮説検定に関して累積カイ二乗統計量、max t統計量の特徴付けがおこなわ

れた。これまで、合同年次大会や種々の学会で発表された結果を、簡潔に、要領よくまとめたもので累積カイ二乗検定、max t検定の意義や重要性を喚起するとともに、この検定法を知らない聴衆に「それは何か」を示す良いイントロであった。次いで凸性、S字性仮説の検定に関する拡張が紹介された。拡張されたこれらの検定統計量は、例えば薬剤の開発に良く現れる非線形用量反応の検定等をふくむ種々の応用の場で重要な意義をもつと思われる。また、凸性、S字性形状を示す用量反応曲線を想定したときの母平均の同時信頼区間の推定法もあわせて紹介された。さらに、2次元配置交互作用や分割表の検定にも拡張出来ることが示され、応用例が紹介された。最後に、最近注目を浴びている遺伝子病関連座位を特定する先端的研究への応用が紹介され、将来への可能性が示唆された。研究のレベルの高さを披歴した大変よい講演であった。

かつての九大グループは、応用から提起された凸性、S字性仮説の検定や信頼区間構成にどのようにアプローチするのかしら。また、凸性、S字性をふくむ非線形反応を対象とするデータ解析では、検定より、むしろモデル化をおこなうことが重要であることが指摘されて久しい。近い将来、合同年次大会で「統計的検定を越えて」というタイトルでの特別講演があればおもしろいな、など講演を聞きながら、ふと思った。

三浦良造氏 (一橋大学) による特別講演「金融工学と統計」について

座長 和合 肇 (新潟大学)

一橋大学の三浦良造氏から最近の金融工学に関するいくつかのトピックスについて、金融工学の発展の歴史的な経緯をたどりながらいくつかの問題を取り上げ、統計学の方法との関連について問題点を整理して報告があった(演題20)。まず、最近開設された一橋大学大学院国際企業戦略研究科の概要について紹介があり、特に三浦氏が所属する金融戦略講座についてその特徴や目指すものについて説明があった。

最初に、現代ポートフォリオ理論という体系的な考え方を唱えたマーコビッツによる、証券の期待収益率の共分散とリスクの分散化との関係を定式化した有効ポートフォリオの概念の紹

介から始まり、収益率の確率変動を期待値と標準偏差という2つの統計量だけを見てポートフォリオ問題を考えるモデルが成立する。この代表的なモデルである資本資産評価モデルにおいて、個別証券のリターンを市場全体の動きで説明しようとするシングル・ファクター・モデルで用いられるベータ係数と統計分析の基本的な方法である単回帰モデルの関係からポートフォリオというものを説明した。さらに、現在では対象となる金融データの非線形的特徴を説明するモデルとしてのARCHモデルや、非正規性という特徴からノンパラメトリックモデルの適用可能性に発展した経過が述べられた。そのほかに、最近の興味ある応用例として金利モデルでの要因分解、倒産確率を求める方法としての生存時間解析の応用、さらに格付け変更への遷移確率の応用例などについて解説があった。

金融工学への統計学の応用については理解が深まりつつあるが、いわゆる金融経済学の理論的な裏付けがないという無理解が依然としてみられるので、今後統計分析の結果を合理的に説明する理論の開発がもっと必要になるということで、この特別講演を終了した。

一般講演 V, VI について

椿 広計 (筑波大学)

演題21. 宮岡悦良 (東京理科大学), Bruce Smith (Dalhousie University), Changchun Xie (University of Guelph) 「2値のクロスオーバーデータの解析について」

2 処理 2 期間,あるいは 3 処理 3 期間のクロスオーバー計画から得られる 2 値応答データのキャリーオーバー効果を含む対数線形モデルで記述する方法について紹介された。特に, Generalized Linear Transition Model (マルコフ連鎖型のモデル) は興味深い。クロスオーバー計画自体は, 個体効果を除去するために行われることが多いので, 個体効果を陽に入れた場合に, この種の分析がどうなるのか, どう変わるのかについては気になるところである。

演題22. 大谷敬子, 佐藤健一, 大滝 慈 (広島大学) 「下顎骨の成長パターンの探索—混

合正規分布を仮定して」

繰り返し測定データによって得られる個体の成長パターンの分類に関して, 個体毎に非線形成長曲線モデルを当てはめ, そのパラメータ推定値を特徴量として, クラスタ分析をおこなうことが有力であるという発表である。確かに観測変量間の距離は, 上手く定義しないと観測期間長に依存しすぎるであろう。基本的に, 2つのシステム間の計量をどのように定義すべきかという情報幾何の問題に帰着するのだと思う。

演題23. 佐藤健一, 中山晃志, 山口直人, 大滝 慈 (広島大学) 「出生時性比の経年変化」

環境ホルモンなどの影響で出生時性比に影響が出ているのではないかをベータ二項分布, ロジスティックモデルなどで検討し, 中規模, 大規模市区町村で女児人口割合の上昇傾向があるという大変興味深い結果を導いている。実証結果が, 環境ホルモン以外の都市要因, 例えば, 出産年齢の違いなどではないといった検証を積み上げることは必要であろう。蛇足だが, 性比のように殆ど50%近傍にしか変動しない変量では, 正規線形モデルの膨大な遺産を活用する事が可能なのではなかろうか。

演題24. 丹後俊郎 (国立公衆衛生院) 「対応のある比率の差に関する推測」

対応のある比率の差に関する推測は, 特に比劣性臨床試験の問題に関係して大きな問題であり, 様々な提案が続いている。この中でエフィシエント・スコアに基づく方法が良い性質を持っているとの事である。演題21のコメントにも触れたが, 個体効果を含むモデルで, この種の推論がどのような挙動を示すのだろうか。

以下の2つの講演は, 応用統計学会が2000年3月22日に行ったワークショップ「要介護一次判定に関わる統計的論点」(オーガナイザー: 岩崎学 (成蹊大学), 椿広計 (筑波大学)) の概要を広く一般に知らせるためになされたものであり, 演題25に関わる資料は, ポスターセッションでも公開された。

演題25. 関 庸一 (群馬大学), 筒井孝子 (国立

公衆衛生院), 谷口仁志 (㈱千早ティ
ー・スリー), 宮野尚哉 (弘前大学)「要
介護認定における一次判定ロジックに用
いられる統計モデル」

介護保険制度の要介護度を認定調査票から一次
判定する際, どのような統計的方法が用いられて
いるかについて, この種の問題に対してどのよう
な統計的方法の適用が望ましいか, 統計解析全体
の構造, 実際に採用されたモデルなどについて,
具体的な紹介があった。

演題26. 岩崎 学 (成蹊大学), 椿 広計 (筑波
大学)「介護保険の一次判定システムに
関する統計学上の論点—介護保険ワーク
ショップでの議論を踏まえて—」

上記ワークショップの概要とその中であった議
論について紹介した。

フロアから統計モデルへの質問・意見などが寄
せられたが, 種々の意見が全て完全な方法を導く
とは考えられない。この種の社会的関心時につい
ては, 今後もこの種の情報公開をベースに専門的
意見交換と試行錯誤を通じた改善が必要である
う。

2000年日本計量生物学会 第2回理事会議事要旨

日時: 2000年5月11日

場所: 総評会館

出席者: 上坂, 大瀧, 大橋, 折笠, 岸野, 佐々木,
佐藤 (俊), 柴田, 椿, 林, 三中, 三輪, 柳川,
吉村 各理事

1. 前回議事録, 議事要旨について承認された。

2. 第8回計量生物セミナーについて

臨床の部担当の折笠理事から4件のテーマ案に
ついて説明があり, 討論の結果「尺度の信頼性評
価」をとりあげることになった。生物の部は三中
理事から, 「生物学に適用される計算機統計学」
を考えていると報告があった。臨床の部, 生物の
部ともに6月中に具体案を固め, 各理事にメール
で連絡する。

また折笠理事から, セミナー会場と開催日時に

ついて再検討してほしいと要望があり, 10月に新
理事が選出されセミナー担当が決まった後で検討
することにした。セミナーの会計について, 学会
の運営資金 (途上国援助, 国際学会開催支援) に
充ててもいいのではないかとの意見があった。

3. ISIサテライトミーティング

柳川理事より, ISIサテライトミーティング
「International Conference on Statistical
Challenges in Environmental Health Problems
環境と健康: 統計科学からの挑戦」(2001年8月
30日~9月1日, 福岡ソフトリサーチパーク) に
ついて, 現在までの進行状況の報告があった。

4. その他

IBS本部から, 次期Vice PresidentとSecretary
の推薦依頼があった(9月15日締め切り)。また,
会費を各支部がまとめて支払うのではなく, 個人
から直接徴収したい, と提案があったが, 日本支
部は現在IBSの会費と日本計量生物学会の会費を
同時に徴収していることから, IBS2000の役員会議
で正式に反対を申し入れることにした。

総会で佐々木会計理事が説明したように, 現在
財政状況は厳しい状況である。これは雑誌の質を
上げたことに起因しており, 解決案として, 1)
ニュース・レターをホームページに掲載し, 単
独の印刷物としての配布をやめる(そのかわりに雑
誌の巻末に印刷して配布する), また2) 掲載原
稿の著者に印刷費を一部負担していただく「ペ
ージチャージ」を導入する, が提案された。それぞ
れの案について予算がどうなるか, 佐々木会計理
事に概算を依頼した。

次回理事会は, 7月にメール理事会を開催し,
次々回は9月8日午後6時から開催予定。

佐藤俊哉

第8回計量生物セミナーのお知らせ

日 時: 平成12年11月10日 (金) 午後~11日 (土)
午前

場 所: 富士教育研修所 (静岡県裾野市下和田
656)

参加費: (宿泊代, 夕食代, 資料代, 講演要旨集
を含む。昼食代は別途)

臨床の部	企業関係者	35,000円
	その他	20,000円
生物の部		20,000円

申し込み締め切り：10月10日（臨床の部は先着100名，生物の部は先着40名）

〔臨床の部〕

【趣旨】

ICHで合意された、「臨床試験のための統計的原則」は、評価のための変数、つまり評価尺度は、その分野の知識から、妥当で信頼性のあるものでなければならない、と注意している。しかしその妥当性と信頼性をどのようにして、確かめるかについては、臨床試験の当事者に任されている。

このセミナーの第1日には、評価尺度を用いた場合、どの程度の吟味をすればよいのか、どういうことが実際に可能か、などを議論の多い精神科領域の例などを引いて議論する。

計量生物学会では、今まで、教育的側面でのセミナーを行ったことがないと思われる。現実には、実際どうすればよいのか、が疑問な問題が沢山ある。今回は初めての試みとして、これを取り上げる。何でも良いというのでは議論が発散するので、二つの課題を設定した。議論を実りあるものにするには、現場からのストレートな疑問が出る方が望ましい。それを巡って、Q & Aに近い形式を取る予定である。

11月10日 午後

テーマ：「臨床評価における評価尺度の妥当性と信頼性」

オーガナイザー：後藤昌司，上坂浩之

講演予定者と仮題：

- 1) 稲田俊也（国立精神神経センター）：新しい錐体外路症状評価尺度の開発
- 2) 鍵村健夫（ペーリンガーインゲルハイム）：海外で開発された評価尺度の導入における信頼性評価
- 3) 関根直樹（武田薬品工業）：信頼性評価の指標に関する統計的推測
- 4) 演者交渉中：信頼性妥当性の尺度についての理論と評価

11月11日 午前

テーマ：Q & A形式での臨床試験における二つ課題についての討論

1) 課題1：盲検の下での被験者数の再計算

オーガナイザー：佐藤俊哉，佐々木秀雄

2) 課題2：混合模型の実用化

オーガナイザー：吉村功，佐々木秀雄

現場から出されている疑問に対して回答者を選んで回答をしてもらい、議論をする予定

二つの課題に関連して、是非これを知りたい、という疑問をお持ちの方は、申し込み用紙に質問事項を具体的に記載して下さい。

〔生物の部〕

テーマ：生物学的諸問題への現代統計学的アプローチ：パラメトリック，ノンパラメトリック，計算機統計学

オーガナイザー：

三中 信宏（農水省・農環研・計測情報科）
mailto://minaka@affrc.go.jp

二宮 正士（農水省・農研センター・研究情報部）

mailto://snino@narc.affrc.go.jp

【趣旨】

生物学の領域で生じるさまざまな基礎的・応用的問題は、数理統計学の理論の形成に大きな役割を果たしてきた。そして、理論的に洗練された統計学的手法は、逆に生物学の実践的問題の解決に寄与してきた。

近年の統計学における理論的進展（たとえば計算機統計学，尤度理論，モデル選択，ノンパラメトリック統計学の分野での展開）を踏まえるならば、生物学が取り組んできた問題群に対して、新たな観点からのアプローチが可能になることが期待できるだろう。それと同時に、伝統的な問題設定の背後に隠れている統計学的仮定を批判的に再検討することにより、これまでとは異なる解決が見出せるかもしれない。

今回の計量生物セミナー（生物の部）では、新たな統計学的方法が適用されつつあるいくつかの生物学領域（生態学・農学・進化学）に焦点を当て、統計学と生物学のやり取りの中で育まれてきた生物統計学の今の姿に光を当ててみたい。

生物学的問題を通じての統計学的思考への関心

を高めると同時に、統計学の立場から見た生物学的な個別問題への議論を深めたいと考えている。

【講演予定者と仮題】

- 三中 信宏（農環研）「趣旨説明と導入的議論」
粕谷 英一（九州大・理）
「parametric/nonparametric統計学」
三輪 哲久（農環研）「順序付きの対比較法の適用」
北門 利英（東水大）「最尤法に基づく推論」
庄野 宏（遠洋水研）「モデル選択とステップ
ワイズ検定」
竹澤 邦夫（北陸農試）「ノンパラメトリック回
帰」
岸野 洋久（東大・農）「経験的ベイズ法の応用」

IBC2000参加報告

栗林和彦（日本イーライリリー(株)）

7月1日から7日にわたってカリフォルニア大学バークレー校において開催された第20回国際計量生物学会議（IBC2000）に参加しました。会議の雰囲気や個人的な印象を中心に簡単に紹介します。

バークレーはサンフランシスコの対岸で、サンフランシスコ市街からバート（Bay Area Rapid Transit）という電車で約30分のところにあり、大学が中心となった学生街でした。

本会議では、1日と2日に三つのショートコースが開催されました。各コースには9時から17時までの丸一日が予定されていました。私は、Liang先生とZeger先生による党Analysis of Data from Longitudinal Studies: Current Topicsを聴講しました。ここでは、経時観測データと事象発現までの期間データを同時に解析するためのモデルを例示とともに紹介することを目標とされていたのですが、時間制限のために後半の難解な部分の説明が駆け足になってしまい、十分に理解できずに残念でした。しかしながら、このテーマに関する第一人者である先生らの説明には説得力と迫力があり、圧倒されました。他の2コースは、Demetrio先生とHinde先生による党Overdispersion: Model and Estimationと、Jennison先生、Turnbull先生、Mehta先生による党Group Sequential Design and Interim

Monitoring of Clinical Trial Data: Statistical Methodology and Computationを聴講しました。

3日から招待講演および一般講演が始まりました。一日の休日をはさんで二日間ずつの計四日間でした。各日ともに90分のセッションが午前と午後に二つずつあり、同時に4会場から8会場で行って進められました。発表は合計で約350件あり、そのうち日本からの発表は13件のようでした。自身の発表が最終日であったため、日ごとに高まる緊張感とともに皆さんの発表を聴いていました。このような中で、午前および午後のセッションの間に設けられた30分の休憩時間にメイン会場前の広場にソーダやクッキーが用意され、さわやかな青空の下で飲む冷たいソーダの気持ち良さが緊張感を少し和らげてくれました。昼休みは90分あり時間的余裕はあったのですが、大学付近の学生を対象としているようなお店の料理はお世辞にも美味しいとは言えませんでした。

聴講した中では、著明な先生による招待講演などは立ち見が出るほど盛況でしたが、聴衆がまばらなセッションもあり、セッション間で聴衆の数にかなりばらつきがあるように思えました。テーマが臨床試験に関係したセッションが比較的盛況だったように思います。

このような世界規模の国際会議に参加してみても、名前だけ、あるいは写真でしか存じ上げなかった著名な先生方を間近で拝見することができ、今後著書や論文を読むときに少しでも身近に感じられるような気がしました。

本会議中に独立記念日が重なっており、街中がお祭り騒ぎでした。これもまた貴重な体験でした。以上

文部省科学研究費シンポジウムのご案内

発表者には旅費が支給されますので奮ってご参加ください。

テーマ：Statistical Issues in Biomedical Research and Drug Development
（生物医学研究と新薬開発における統計学的論点）

開催時期：平成13年3月8日午後～3月9日

開催地：富山市・高志会館

問い合わせ先：

田中豊 (tanaka@stat.ems.okayama-u.ac.jp)

または

折笠秀樹 (horigasa@ms.toyama-mpu.ac.jp)

編集後記

今回は2001・2002年度役員選挙のお知らせが載っています。ぜひ、忘れずに投票をお願いいたします。また、本号には年次大会報告、第8回計量

生物セミナーのお知らせが掲載してあります。計量生物セミナーは臨床の部、生物の部とも人数に限りがありますので、早めのお申し込みをお勧めいたします。

本号が、現編集委員会の任期最後のニュースレターとなります。ニュースレターは会員相互の情報交換の場でもあります。国際学会や関連会議の参加報告や印象記、研究活動などの報告を歓迎します。どしどしお寄せ下さい。

日本計量生物学会事務局

〒107-0062 東京都港区南青山6-3-9 大和ビル2F

(財) 統計情報研究開発センター内

日本計量生物学会事務局

FAX 03-5467-0482

e-mail: biometrics@sinfonica.or.jp

広報委員会 山岡和枝, 林 邦彦

山岡連絡先：

〒173-8605 板橋区加賀2-11-1

帝京大学医学部衛生学公衆衛生学教室

TEL：03-3964-1211 (内線2178)

FAX：03-3964-1058

e-mail:kazue@med.teikyo-u.ac.jp